

# 第39回 長野県幼児教育研究大会分科会 実施報告書

作成日

27年 11月26日

分科会	第3分科会 テーマ「地域・家庭支援・保護者との関わりから「食育」について考える。」 —生きる上での基本から「知育」「徳育」「体育」を考えてみる。—		
分科会 日時	平成27年10月31日（土曜日）	13時00分	～ 16時00分
研修会場	飯田女子短期大学（看護棟1階 多目的ホール）	参加人数	77名
助言者名 (所属等含む)	碓井 幸子先生（清泉女学院短期大学 幼児教育科 准教授）		
担当者	運営委員 小松 瞳	研究委員 田口 恵美子	
	責任者 小林 順子	司会者 小林 順子	
	提案者 天田 淑江		
	林 さと美		
	記録者 南澤 有香 ・ 宮下 萌		
研修会 概要	1. 提案園による発表		
	坂城幼稚園		
	《研究テーマ》食育を通して、目の前の子どもの姿から、子どもたちの育ちをどう見取り、 どう支援していったらよいのだろうかをテーマに活動してきた、各年令の行事での取り組み について発表する。（別紙研究資料参照）		
	カトリック幼稚園		
	《研究テーマ》食物を育てる、食事を作る、用意する、食べ物をいただく等、食事をする ための経験、体験を通して、園と家庭とが協力し合い、生きる力となる食育とは？「命をい ただく自然の神秘を感じる、感謝する、郷土料理にふれる」をテーマに“イナゴとり”の活 動を通しての取り組みについてビデオを交えて発表する。（別紙研究資料参照）		
	カトリック幼稚園ビデオより		
	・異年齢で関わりながら全園児でイナゴをとりに行く。		
	・何匹も捕まえる子、なかなか見つけられずに悔しがる子などいるが、年長クラスには 経験があるためか上手に捕まえている子もいる。		
	・朝、イナゴとりを嫌がっていた子も、保護者の援助もあり、直接手に触れつかむことが できた。		
	・出来立てのイナゴの佃煮を2人の女の子が嬉しそうに抱え、園庭で遊んでいる友だちに 分けてあげようと自分達から進んで持って行く。それを苦手だった子も自ら口にし、お いしそうに食べる姿が見られる。		
	2. グループ討議		
	①自己紹介を含めた話題提供に対しての、感想や意見などを付箋に書いて出し合う。		
	②イナゴをいただきながら、出てきた意見をまとめる。		
	③子どもとしたい「食育」に関する活動について整理する。		
	④その活動について色々なアイデアを出し合う。		
3. グループごとの発表			
私たちが育てたい、子どもと共に行きたい夢の保育とその実現に向けた提案とは？			
12グループに分かれ、各グループより様々な保育活動が提案された。			

	<p>(主な提案)</p> <p>魚のつかみ取り体験 …・川に行つてつかみ取り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・魚を1匹丸ごと食べる体験</li> </ul> <p>お米作り体験 …・田んぼがないのならバケツを使って作つてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の方に米作りを教えてもらう。</li> <li>・田んぼで泥遊び。</li> <li>・もち米でおはぎ、おせんべい作り</li> </ul>
助言者指導	<p>○坂城幼稚園では、子どもの育ちをさぐるという話題提供であつた。</p> <p>基本的な生活習慣、意欲、自信、自立を基において、自ら関わる力や興味関心、探求心が育つ姿である。自立というのは、できるできないではなく、「自分でやろう」という姿がとつても大切で、それがベースで食育にもつながつているという話題提供であつた。</p> <p>○カトリック幼稚園では、イナゴの活動で子どもが必要としている体験や学びとは何かという話題提供であつた。こども一人ひとりの姿に寄り添いながら、様々なことを発見していった。</p> <p>「分かる」子の姿を細かく追つていき、「つながる」「工夫する」「繰り返す」「食べる」「意欲」「感謝」「伝える言葉」「畏敬の念」「郷土文化」「感じる」「知る」このようなことはどのようなことなのか考えていくものであつた。</p> <p>○2園を合わせると「子どもの育ちのために幼稚園教育と家庭との連携はどのようにしていったら良いだろうか」ということが考えられる。</p> <p>そのためにも、私たちが臨床保育（保育の現場において時々刻々と変化する子どもと子ども子どもと大人の関わりを観察し、情報交換→環境配慮広い座から検討→子どもの成長、発達を思想する作業）が必要である。</p> <p>子どもが見えない環境や遊びの本質理解ができない→保育のマンネリ化</p> <p>現状の子どもをしっかりと捉え、子どもを取り巻く背景には社会の価値観と多様性また地域、社会環境の変化、家庭教育力の支援といったことを常に考えていく必要がある。</p>
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各地域の園で、今後食育を通じて色々な活動がアイデアとして出された。このことにより、今後の園の活動に参考になることがあつたのではないかと思う。</li> <li>・食育については、家庭や地域との連携がとつても大切なことがわかる。今後も園全体で子どもを取り巻く環境にしっかりと目を向け、どんな取り組みが必要なのかを引き続き考えていくようにしたい。</li> </ul>
配布資料	坂城幼稚園、カトリック幼稚園各研究会資料
使用機器等	<p>マイク・プロジェクター・スクリーン・パソコン</p> <p>模造紙・付箋・マジック</p>
記録写真	<p>(有) 無</p>

# 第39回 長野県幼児教育研究大会分科会 実施報告書

作成日 27年 11月 24日

分科会	第4分科会 テーマ「明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう保育とは ～一人ひとりが夢中になって活動に取り組む姿を求めて～」			
分科会 日時	平成27年10月31日（土曜日）	13時00分	～ 16時00分	
研修会場	飯田女子短期大学（本館2階 第2教室）	参加人数	100名	
助言者名 (所属等含む)	帝京科学大学 教授 赤羽根 直樹 先生			
担当者	運営委員	西片 紀美子	研究委員	本郷 恵
	責任者	続麻 あゆみ	司会者	山本 愛
	提案者	大槻 真弓		木戸 彩加
		百瀬 咲恵	記録者	藤澤 夏帆
				谷口 陽菜
研修会 概要	<p>&lt;松本いずみ幼稚園&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉遊びを通して段階的に発展した「ボール遊び」「バランス遊び」に着目し、事例を基にそれぞれの遊びで育つ力、子どもや教師と関わっていく姿について発表した。実際の事例の中から、保育者は、環境の中に様々なきっかけや遊びを広げる可能性を準備し、子どもたちが夢中になって遊びこめるよう、日々、子どもの興味関心や一人ひとりの課題を見出し、子どもの育ちを保証することに繋がった。</li> <li>・様々なことを経験する中で、始めはできないことも諦めずに繰り返し遊びを発展していくことの大切さや出来た時に周りの教師や友だちから認められる喜びが遊びを面白くし、それぞれが新たな目標へ向かって心も体も成長していくことができた。</li> <li>・遊びに抵抗感を持つことなく、遊び込めるような雰囲気作りや関わり方を日々考えて保育実践する重要性を学んだ。</li> </ul>			
	<p>&lt;松本南幼稚園&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児の3年間の体を動かす遊びを通して、心と体の発達に視点を置き、4つの事例を発表した。年少時、クラスみんなで運動遊びを楽しむことで、無理せず体の使い方を身に付けた。年中時、体育カードを用いたことで、体を動かすことを苦手としていた子も自ら挑戦し、繰り返し行う姿が見られた。明確な目標と達成するたびにもらえるご褒美シールで、意欲が増したようだ。年長時、個々に合わせたアドバイス(指導及び援助)を行うことで、諦めず取り組む子どもの姿が出てきた。「できた」という経験が自信へと繋がり、更に挑戦する姿も見られた。保育者は、個々の子どもの様子や実状を見取り、子どもに応じて対応していくことの重要性を学んだ。3年間の運動遊びにおいて、体を動かす楽しさを知り、友だち関係も含め、友だちと一緒に遊んだからこそその心の成長も見られた。自信を持ち、夢中になって取り組み、どんなことにも挑戦する心も育っていった。</li> </ul>			
	<p>&lt;グループ討議&gt; 15グループに分かれ、各園の行っていることや討議の柱にそって話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの育てたい面を明確にし、保育者が目的を持って行くことが大切であり、運動と捉えず、日常生活の中で行い、何気なく力をつけていきたい。また物的・人的環境、両方をバランスよく整えていくことが大切である。</li> <li>・体を動かす遊びの中で、積極的に取り組む子とそうでない子の差もある。保育者のきっかけ作りや子どもの自信となる言葉掛け・クラスや異年齢の友だちとの刺激からやる気へと繋げていきたい。</li> <li>・保育者自信が活動を楽しむ姿を見せることで、子どもの「やってみたい」という意欲に繋がる。</li> </ul>			

	<p>・自由遊びの時間に夢中になれる運動遊びを思い切り行うことで、運動能力が高まることがわかったので、大切にしたい。      たくさんの意見が出て、充実した討議となった。</p>	
助言者指導	<p>・人間は生まれた時から「遊びたい」という欲求があり、生まれて3年の間にその欲求が身に付く。遊びの中にこそ将来に繋がる様々な要素がある。遊びを通して様々な教育ができる。運動遊びは身体活動を伴う自由な遊びのことであり欲求のままに行われる。体育遊びは保育者が意図的・教育的に行われる運動遊びのこと。体育遊びは運動遊びを取り込んで、教育的に行うことが良いとされる。</p> <p>・<b>子どもの体力の実状</b> 睡眠・朝食が大切であり、2つをよく行う子の方が体力が高い。</p> <p>・<b>運動遊びの効用</b> 身体機能・運動技能を高める 自立心・忍耐力・積極性・想像力など精神面の発達と感性を高める ルールを守る・協力するなど社会性を高め、身体だけでなく、心の発達も期待できる。</p> <p>・<b>幼児体育指導の心構えとして</b></p> <p>① 楽しい遊びであること(楽しいから積極的に取り組み、工夫し、努力し、身に付く)</p> <p>②内容に偏りが無いこと ③十分な運動量を保証する ④季節・時期を考える</p> <p>⑤バリエーション豊かに 今、できる環境の中で多様な運動パターンの遊びを取り入れる</p> <p>⑥発達に合った遊びの工夫 ⑦挑戦する気持ちを育てる ⑧安全に配慮する</p> <p>・<b>運動指導のコツ</b></p> <p>①最初の言葉掛け ②視覚で理解できるように ③促す言葉 (しましょー ○○します)</p> <p>④叱るとき 後のフォロー ⑤意欲を引き出す発問 言葉掛け</p> <p>(法則として 子どもを見る→見届け褒める→安心できる言葉掛け→褒める(個人的・全員の前))</p> <p>・<b>運動意欲を高める(遊びに夢中になる)には、</b></p> <p><b>内発的動機</b>→①競争の要求 ②達成する喜び ③模倣・変身の欲求</p> <p>④克服への喜びが大切である。その遊びへの面白さに触れる&lt;楽しくて仕方ない&gt;</p> <p><b>社会的動機</b>→幼児期は、競争させるよりも達成感・模倣を楽しく味わせることが大切である。満たされるとやる気になる。1人ひとり、子どもの動機を見極めることが必要であり、今回の場合は、体育カード(シール)が外発的ご褒美となる。シールをもらったことで内発的動機が上がり、子どもの質を高めていくことになった。</p> <p>・<b>運動指導と運動発達</b> 運動指導の頻度が高いほど、継続して行おうとする気持ちが薄れていくため、運動能力は低いという結果がある。</p> <p>・<b>保育形態と体力、運動能力</b> ①自由な遊び中心(保育環境を整えて指導する) ②一斉指導中心遊びでなくなる ③自由な遊びと一斉指導を半々 と3種類あり、1番運動能力を伸ばすものは①である。自由な遊びを引き出すため保育者が関わり、個々に合わせた援助が大切になっていく。また運動時間は午前中、15:00以降それぞれ行うことが効果的である。</p>	
	成果と課題	<p>・日常生活・保育活動の中で身に付けたい『基本動作』を様々な遊びを通して経験し、子どもたちが獲得することで自己現実でき、充実感を味わえるよう保育内容を検討したい。(松本いずみ幼稚園)</p> <p>・よりいっそう自信を持ち夢中になって取り組み、挑戦する心を育てると共により多くの友だちとの関係が持てるような援助の方法を考え、実践していきたい。(松本南幼稚園)</p>
	配布資料	各園 当日資料
	使用機器等	PC・スクリーン・マイク2本
	記録写真	㊦ 無